7 近世の文学

単元のねらい

◆時間の経過や地域による言葉の変化について理解する。
◆俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わう。
◆古跡や伝統行事を調べることを通じて歴史を再発見し、随筆を書く。
・言葉の変化と方言とを結び付けた「田舎に雅言の残れること」を読み、時間の経過や地域による言葉の変化について理解する。
・俳諧や古典を踏まえた表現などを工夫した俳文「おくのほそ道」を読み味わう。
・過去の歴史的な出来事や事跡を調べて得られた「再発見」の内容を、比較的自由にまとめることができる随筆で表現させる。

本単元は古文編最後の単元である。一年間で学習した古典の言葉と現代の言葉とのつながりを理解し、過去の歴史的な出来事や事跡から新しい発見をすることで、自分の言語文化のルーツを知ることをねらいとしている。

単元の構成

「おくのほそ道」より、「旅立ち」「平泉」「種の浜」、「玉勝間」より、「田舎に雅言の残れること」、計四教材を取り上げた。「旅立ち」では、作者の旅に生きる精神を高揚したリズムで綴っている。「平泉」では、自然に対する人為のはかなさを詠嘆している。「種の浜」では、ますほの小貝を拾う行為から、芭蕉の旅への思いを理解することができる。「田舎に雅言の残れること」では、国学者である本居宣長が、地方に昔の言葉が残っている事実について考察している。

「古文の窓６　写本の本文――「青々たり」と「草青みたり」」では、版本と写本の違いを知り、写本では本文が変化することについて、具体例に即して解説している。

「単元の言語活動７　歴史を再発見し、随筆を書く」では、歴史を再発見することの意義、ひいては、古典の作品が現代に至るまで先人達によって伝えられてきたことの意義について、生徒に考えさせる。